

営農だより

金沢営農協議会
J A 金沢市
石川県農業共済組合

5月のポイント ～高品質金沢産米づくり運動10の推進技術～

- 5月田植えの励行 ○育苗日数は、1か月以内 ○植付本数は、1株当たり3～4本
- 地帯・作型に応じた栽植密度 ○高温登熟に対応した施肥体系の見直し

本田初期管理

- 1 過剰生育や高温下での登熟を避けるため、5月植えを推奨します。
- 2 過剰生育を抑えるため、植付け本数は、「3～4本/株」の細植えにする。
- 3 適正な穂数になるよう、平坦部の普通期移植の栽植密度は「60株/坪」とし、地力が高い圃場では、栽植密度を「50株/坪」とする。
- 4 山間部、晩期コシヒカリ及び平坦部で低地力の圃場は栽植密度を「60株/坪」以上とする。
- 5 田植から活着までの5日間は深水とし、その後は地温の上昇を図るため、日中は浅水管理とする。
 - ① 田植後15日頃から中干し開始までの間に2～3回田干しを行い、土壌中のガスを取り除き、根の健全化を図る。
 - ② 低温、強風、フェーン時は一時的に深水とし、苗を保護する。

初期害虫・葉いもち防除（箱施薬剤）

区分	薬剤名	使用時期	施用量	対象病虫害
基本	Dr.オリゼ フェルテラ粒剤	緑化期～移植当日	50g/箱	いもち病、ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ、イネドロオイムシ、イネミスゾウムシ、ニカメイチュウ、イネツトムシ
紋枯 多発圃場	エバーゴルフフォルテ箱 粒剤	は種時(覆土前)～ 移植当日	50g/箱	いもち病、 紋枯病 、白葉枯病、イネドロオイムシ、イネミスゾウムシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ
	ブイゲットアドマイヤー リンバー粒剤	移植2日前～ 移植当日	50g/箱	いもち病、 紋枯病 、白葉枯病、もみ枯細菌病、イネドロオイムシ、イネミスゾウムシ、ウンカ類、ツマグロヨコバイ
イナゴ 多発圃場	Dr.オリゼ プリンス粒剤6	緑化期～移植当日	50g/箱	いもち病、もみ枯細菌病、白葉枯病、イネミスゾウムシ、イネドロオイムシ、ニカメイチュウ、 イナゴ類 、ウンカ類、イネツトムシ

注意事項・育苗箱1箱当たり50gの施用量を厳守しましょう。

- ・育苗後、ハウスで園芸作物を栽培する方は、箱施薬剤の散布を必ず育苗ハウスの外で行って下さい。
- ・使用時には薬剤名を確認し、除草剤との取り違いに注意して下さい。

- 箱施薬剤を施用していない圃場で、イネドロオイムシやイネミスゾウムシが発生した場合は、次の薬剤を散布して下さい。薬剤名：トレボン粒剤 使用量：2～3kg/10a（湛水状態で散布）

畦畔および農道の除草剤：無登録農薬、非農耕地除草剤は使用しない

使用時期	薬剤名	薬量	水量	散布面積	使用回数
雑草発生前	カーメックス顆粒水和剤	80g	40ℓ	400m ²	どちらか 1回
	ダイロンゾル	80ml	40ℓ	400m ²	
4月～6月 雑草発生盛期	ラウンドアップマックスロード	200ml	20ℓ	400m ²	3回以内
	バスタ液剤	200ml	20ℓ	400m ²	2回以内

- (注1): バスタ液剤にカーメックス顆粒水和剤又はダイロンゾルを混用して散布すると、抑草期間が長くなります。
(雑草発生前にカーメックス顆粒水和剤又はダイロンゾルを使用した場合、雑草発生盛期には散布できません)
(水20ℓに対して、バスタ液剤200mlとカーメックス顆粒水和剤40g又はダイロンゾル40mlを混ぜる)
- (注2): 飛散防止のため風の強い日の散布はさける。
- (注3): ラウンドアップマックスロードの使用回数には、他のグリホサート系除草剤の使用回数も含まれますので、注意して下さい。

JA金沢市のホームページにも営農だよりを掲載しております。「JA金沢市」で検索して下さい。

栽培履歴はしっかりと記録、安全・安心の米づくりをしましょう。

代かきは浅水で行い、田植時の濁り水流出を防止しましょう。

農薬を使用する時は適正使用とあわせて、飛散防止にも気を付けましょう。

耕起・代かき・田植後は、農業機械に付着した土を一般道に落とさないよう注意しましょう。

本田の除草剤使用

◎除草剤の効果維持と用水への流出を防ぐため、散布後3～4日間は湛水状態を保つ。

1. 基本タイプ

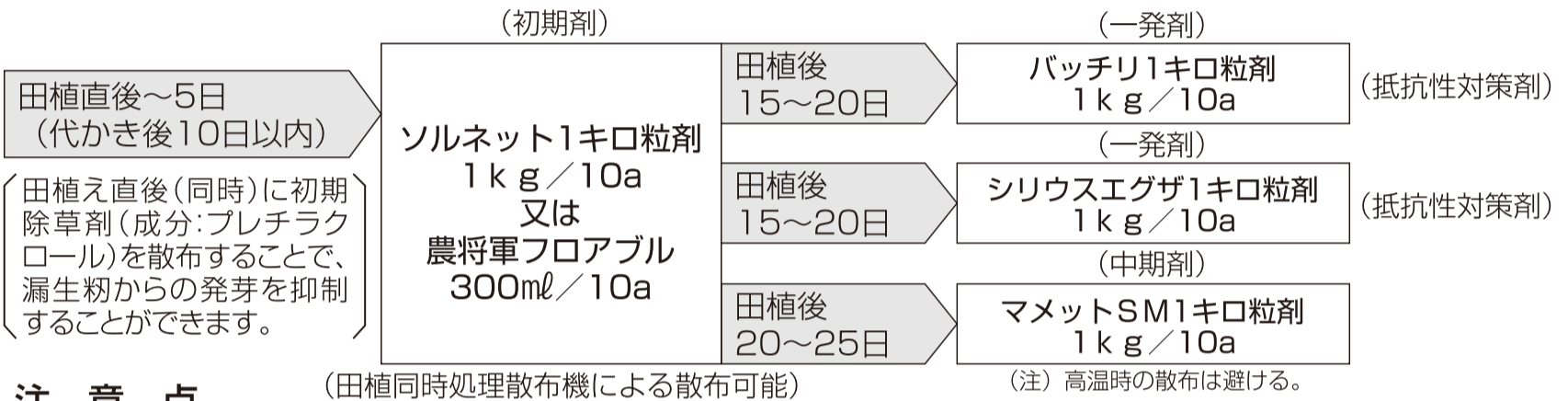
田植直後～10日 (代かき後14日以内)	バッチリ1キロ粒剤 1kg / 10a	(田植え同時処理散布機による散布可能) <抵抗性雑草対策剤>
田植直後～10日 (代かき後14日以内)	シリウスエグザ1キロ粒剤 1kg / 10a	(田植え同時処理散布機による散布可能) <抵抗性雑草対策剤>

2. 省力化タイプ

田植直後～10日 (代かき後14日以内)	バッチリジャンボ 40g × 10個 / 10a	(畦からパック剤を手軽に投げ込むタイプ、拡散性が高い) <抵抗性雑草対策剤>
田植直後～10日 (代かき後14日以内)	バッチリフロアブル 500ml / 10a	(畦からボトルを振るタイプ、水口からの施用も可能) <抵抗性雑草対策剤>

3. 雑草が多い田、代かきから田植えまでの期間が長い場合

昨年と違う品種を作付けした圃場については、漏生劣発生防止対策として、下記の体系処理を行って下さい。



◎ 注 意 点

- 田植前にソルネット1キロ粒剤・農将軍フロアブル等の初期除草剤を散布した場合、田植は除草剤散布から8日後となるので注意する。
- フロアブル剤、ジャンボ剤は特に水持ちの良い圃場で使用する。(3日以上もの湛水が必要)
- 除草剤の種類に応じて田植同時散布機(こまきちゃん等)の開度調整を行うこと。
- 田植同時除草剤を使用する場合、苗の根が除草剤に接触すると薬害を生ずることがあるので注意する。
※水持ちの悪い圃場や植え穴の戻りが悪い圃場では使用しない。(代かきを丁寧に行うこと)
※極端な浅植えにならないよう田植機の植え付け深度を事前に調整する。
- マメットSM1キロ粒剤は、気温27℃以上となる高温時は薬害が生じる恐れがあるため、散布しない。
- 藻の発生した圃場では、モゲトン粒剤を3kg / 10a散布する。

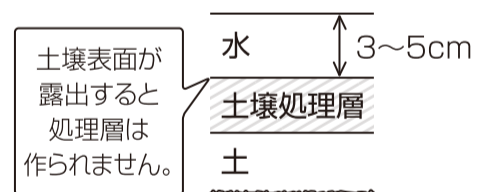
本田除草剤の上手な使い方

1. 田面の凸凹がないように均平にする。

・土が水面から露出していると、その部分だけ除草剤の効果が劣ります。

2. 正しい使用時期に散布する。(農薬のラベルを確認)

・時期が遅いと、大きな雑草をとりこぼしてしまいます。
・使用時期は、移植日(田植日)を起点にした日数とノビエの葉期で表記されています。



【使用時期の記載例】

「移植後5日から15日(ノビエ2.5葉期まで)」

移植後5日から15日までが使用時期ですが、移植後15日以前であってもノビエが2.5葉期(葉数が2.5枚)になった場合には散布が必要です。

3. 散布後3～4日間は湛水状態(水深3～5cm)を保ち、土壌表面の除草剤の処理層を崩さないために散布後7日間程度は止水管理とする。

4. ジャンボ剤は、拡散性を高めるため十分な水深(5～6cm)を確保して水田に均等に投げ入れる。

5. フロアブル剤は、容器の底に有効成分が沈殿している場合があるのでよく振ってから散布する。

農薬・除草剤は登録された使用方法を守りましょう。栽培履歴記録簿も忘れずに。

ご不明な点はJA金沢市、県央農林総合事務所(電話204-2101)へお問い合わせ下さい。

中干し開始の目安は田植後1ヶ月！！